

主 題：福音宣教

聖書箇所：テサロニケ人への手紙第一 2章4節

「福音宣教」、恐らく皆さんは日々の生活を通して福音を伝えるというこのすばらしい働きに励んでおられると思います。確かに、私たちは福音を伝えるという大切な働きを主からいただき、その働きを行うのですが、その働きが主に喜ばれているかどうかを吟味されたことはありますか？確かに、福音を伝えているけれど、その自分の働きは神に喜ばれているのかどうか？実は、それは大切なことだということは言うまでもありません。今日、私たちは信仰の大先輩であるパウロから、その福音宣教について学んでいきます。

パウロの福音宣教を考えると、いろいろな思いが出て来ますが、間違いなく言えることは「彼の宣教は迫害と困難の連続であった」ということです。大変な困難を経験しました。Ⅱコリント11章にはそのことが記されています。11：23-27「：23 彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうなのです。私の労苦は彼らよりも多く、牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。：24 ユダヤ人から三十九のむちを受けたことが五度、：25 むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。：26 幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、：27 労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。」と、私たちが経験したことのなような苦しみ、肉体的な苦しみも精神的な苦しみも、様々な苦しみを彼は経験しているのです。

確かに、主が救いに与ったばかりのアナニヤに対してパウロに関してこのように告げています。使徒の働き9：16「彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです。」、まさに、この通りでした。しかし、このような困難の中にあってもパウロは忠実に宣教の働きを成し遂げていくのです。私たちが注意しなければいけないことは、パウロだからそれができて私たちにはできないと、そのように思ってしまうことです。今日、私たちが見ていくみことばは、パウロのピリピとテサロニケでの宣教における彼の証です。そして、この彼の証には、同じように福音宣教をする私たちが見習うべき「宣教の三つのカギ」が記されています。このことを通して、ご自分の信仰を福音宣教を吟味する機会になることを願っています。テキストはⅠテサロニケ2章です。

☆福音宣教の三つのカギ

A. 福音宣教の力 2：2

Ⅰテサロニケ2：2から見ます。「ご承知のように、私たちはまずピリピで苦しみに会い、はずかしめを受けたのですが、…」、私たちがこの福音宣教の働きをしていくには間違いなく「力」が必要です。その力をどこから得るのか？このことは私たちにとって非常に大切なことです。まず、パウロはピリピとテサロニケの町でどのような働きをしたのか、そのことを彼は教えています。

1. ピリピでの働き

「私たちはまずピリピで苦しみに会い、」とあります。パウロにはシラスが同行していたのですが、この二人は小アジア、今のトルコからヨーロップへと移っていきます。彼らはネアポリスの後、ピリピへとやって来ました。みことばによればここに数日間滞在したとあります。このピリピの町でどのようなことを経験したのか？そのことは詳細に記されていません。「ご承知のように、」と、もうテサロニケの人たちはパウロたちがピリピの町でどんなことを経験したのかを知っていたので、敢えてその説明を省いたのです。でも、私たちはみことばから彼らの経験を知ります。

まず、パウロたちがピリピを訪問したときに、テアテラ市の紫布の商人であったルデヤというひとりの女性と会うことを神ご自身が導かれました。紫布というとても高価な布を売買している女性でした。神は彼女の心を開かれて彼女は信仰に至ります。しかも、彼女だけでなく彼女の家族も信仰に導かれて揃ってバプテスマを受けたことが、使徒の働き16章に記されています。その後、彼らが祈りの場所に行こうとするときに、占いの霊に憑かれたひとりの若い女奴隷と出会います。そして、彼らは女奴隷からその霊を追い出すのです。もちろん、この霊は悪霊です。そのことによって、彼女を使って儲けを得ていた主人たちがパウロたちを訴えるのです。そして、その後、彼らはここで迫害を経験することになります。

・苦しみに会い 使徒16：12-40：この町で何度もむちを受けました。私たちは細い皮の紐のむちを想像しますが、ここでは棒によるむちです。棒で打ちたたかれたのでしょう。そして、投獄されたことも記されています。ですから、大変な迫害を経験したのです。

・はずかしめを受けた 使徒 16 : 16-24 : その上、彼らは「はずかしめを受けた」とも書かれています。肉体的な痛みだけでなく、辱めを受けたのです。これは「公に恥辱を味わった」ということです。ひとつ言えることは、パウロたちが受けたこの仕打ちは全く不当でした。パウロたちはそのような目に会う悪事は働いていなかったからです。でも、彼らは鞭打たれ足かせをされて投獄されたのです。パウロはローマ市民でした。ローマ市民がそのような仕打ちに会うことはなかったのです。でも、そのことを知らなかった長官たちはそのような懲らしめを与えた、人々の前で辱めを与えたのです。

これがパウロたちがピリピの町で経験したことです。そのことがこの2節の初めに書かれています。

2. テサロニケでの働き

その後、「私たちの神によって、激しい苦闘の中でも大胆に神の福音をあなたがたに語りました。」「あなたがたに語りました。」と場面が変わっています。ピリピでのことを話した後、こんどはテサロニケでも語るのです。ピリピでの大きな迫害を経験してパウロたちはテサロニケに来ます。

・大胆に語りました : そこでパウロたちがしたことは「大胆に神の福音をあなたがたに語りました。」でした。普通なら、様々な迫害を経験すると消極的になりがちですが、パウロたちはひるむことなくテサロニケでも同じことをするのです。「大胆に…語った」ということばは新約聖書中に9回出て来ますが、「自由に語る、すべてを語る、大胆にまた勇敢に語る」という意味です。確かに、迫害の恐れはあったでしょう。それらを経験して来たからです。でも、パウロたちはその中で勇敢に、しかも、すべてを自由に妨げられることなく語ったのです。危険や激しい反対に直面しても、勇気や大胆さを持つことによって大胆に福音を語り続けて行ったのです。

そして、「やっぱりパウロだから、パウロだからできたのだ。」、シラスもともにいたのですが、「この人たちは特別だから…ひるむことなく福音宣教を継続したのだ」と、そのように思いませんか？でも、みことばはそのようには教えていません。秘訣があるというのです。「激しい苦闘の中でも大胆に神の福音をあなたがたに語りました。」と、パウロはこの大胆さは自分をもって生まれた性質ではないということ

言います。もし、そうならこう言ったでしょう。「生んでくれた親に感謝します」と。彼が言ったのは「私たちの神によって、」です。つまり、彼らの大胆さのその根拠、源はいったい何なのか？それは「神」だと言います。ですから、福音宣教に敵対する人がどんなに多くても、どんなに迫害が厳しくても、神が神の福音を語る勇気を与えてくれる、それがパウロのメッセージです。どんなときでも、神がその勇気を与えてくれると…。

思い出しませんか？イエスが天に凱旋して行かれたときに、その有様を見ていた弟子たちに御使いが語りました。使徒の働き 1 : 8 「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」と。なぜ、このようなことを告げたのか？彼らはもう証人として出て行くことができたのですが、聖霊が来るまで待ちなさいと言います。なぜか分かりますね。私たちは自分たちの力である程度の働きはできても、神の望んでおられる働きをするには、神の助けが要るからです。私たちが神の力をいただいて働きをするなら神は用いてくださる、それを神は望んでおられます。だから、聖霊が来るまで待ちなさいと言われるのです。

質問ですが、あなたにはいつ聖霊がやって来ますか？もし、あなたがイエス・キリストを信じて救いに与っているなら聖霊をいただいています。聖霊をもっていないクリスチャンは存在しません。聖霊をいただくということはその人が救いに与かるということです。ですから、もうこの力は私たちに与えられているのです。私たちは聖霊を待つではありません。与えられた聖霊をもって私たちは働きを為していくのです。ですから、この真理を知っていたパウロは兄弟姉妹に何を求めているのか？たとえば、エペソの教会にパウロは祈りを求めました。エペソ 6 : 20 に「私は鎖につながれて、福音のために大使の役を果たしています。鎖につながれていても、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。」と、パウロのような偉大な信仰者なら人に祈りを求めなくても十分に出来るのではないか？と思うのでしょうか？いいえ、彼は人々に祈りを求めました。大胆に語り続けていけるようにならうと祈ってほしいと。

非常にすばらしい信仰者です。迫害の中でも大胆にみわざを成し続けて来たパウロ、でも、皆さん、大胆な信仰者はパウロだけではありません。みことばを見ると、大胆な信仰者はたくさんいます。そのうちの二人、使徒の働き 4 章にペテロとヨハネのことが書かれています。4 : 1-31 ですが、この状況を想像するとドキッとします。というのは、ペテロとヨハネが民を教える福音を語っています。彼らを通して福音を聞いた人たちが大勢救いに与りました。その数は男だけで5000人いたと書かれています。4 : 4 「しかし、みことばを聞いた人々がだぜい信じ、男の数が五千人ほどになった。」、その翌日に何が起こったのか？ 4 : 5-7 「5 翌日、民の指導者、長老、学者たちは、エルサレムに集まった。:6 大

祭司アンナス、カヤパ、ヨハネ、アレキサンデル、そのほか大祭司の一族もみな出席した。：7 彼らは使徒たちを真ん中に立たせて、「あなたがたは何の權威によって、また、だれの名によってこんなことをしたのか」と尋問した。

した。」、エルサレムの宗教家たちのエリートが集まったのです。最高の知識をもった人たち、宗教のリーダーたちがみな集まったのです。そして、彼らに囲まれて使徒たちは真ん中に立ちます。

この後見ていくと、ペテロとヨハネは大胆に語っていきます。13節には「彼らはペテロとヨハネとの大胆さを見、またふたりが無学な、普通の人であるのを知って驚いたが、ふたりがイエスとともにいたのだ、ということがわかって来た。」、この宗教家たちが見た時、使徒たちは何の教育もなかったけれど大胆に福音を語るのです。神の真理を告げるのです。驚いたでしょう。どこからこの大胆さを得たのか？彼らは「イエスとともにいたのだ、ということがわかって来た。」とあります。少し戻って、4：8に「そのとき、ペテロは聖霊に満たされて、彼らに言った。「民の指導者たち、ならびに長老の方々。」と、ここにカギがあると思いませんか？確かに、ペテロは漁師でした。パウロのようではなかった。宗教家としての訓練も彼は受けていませんでした。でも、聖霊が彼を満たしたとき、彼は大胆にこれら宗教家たちの前で語り始めるのです。間違いなく、この様子を見ていた人たちも彼らの大胆さに気付くのです。

そして、この後、宗教家たちはどうすればいいのか分からなかった、そこで18節「そこで彼らを呼んで、いっさいイエスの名によって語ったり教えたりしてはならない、と命じた。」とあります。彼らはこのように答えます。19－21節「ペテロとヨハネは彼らに答えて言った。「：19 神に聞き従うより、あなたがたに聞き従うほうが、神の前に正しいかどうか、判断してください。：20 私たちは、自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません。」と。「：21 そこで、彼らはふたりをさらにおどしたうえで、釈放した。それはみなの方が、この出来事のゆえに神をあがめていたので、人々の手前、ふたりを罰するすべがなかったからである。」、23－25節「：23 釈放されたふたりは、仲間のところへ行き、祭司長たちや長老たちが彼らに言ったことを残らず報告した。：24 これを聞いた人々はみな、心を一つにして、神に向かい、声を上げて言った。「主よ。あなたは天と地と海とその中のすべてのものを造られた方です。：25 あなたは、聖霊によって、あなたのしもべであり私たちの父であるダビデの口を通して、こう言われました。『なぜ異邦人たちは騒ぎ立ち、もろもろの民はむなしいことを計るのか。』と、このことがあって、29節「主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。」と、ペテロたちの証を聞いた仲間たちは神の前にこのように祈るのです。31節には「彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語りだした。」とあります。

今、私たちが見ているのは、この人たちの力はこの人たちが生まれながらに持っていたのではなかったということです。神が彼らの力でした。ですから、彼らはその神に助けを求めたのです。パウロもそのようにして生きていました。ペテロもヨハネも仲間たちも…。これは私たちにも必要なことだと思いますか？もう私たちはコリント書を学んで教えられたように、私たちの巧みなことばによって人を救いへと導くことはできません。Iコリント2：4「そして、私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行われたものではなく、御霊と御力の現れでした。」と。たとえ、彼らが「イエス」と言っても、その救いが本物かどうかは分かりません。神が人を救うのです。ですから、私たちが福音を伝える者としてしっかり覚えることは、私たちの力は私たちにあるのではなく、神にあるということです。神の力をいただきながらその働きをするのです。福音宣教にはこの力が要るのです。

B. 福音宣教の動機 3節

さて、その事実を語った上で、今度はパウロは「福音宣教の動機」へと話を移していきます。2：3「私たちの勤めは、迷いや不純な心から出ているものではなく、だましごとでもありません。」、ご覧いただくと、ここには三つの「正しくない動機」が記されています。「迷い」「不純な心」「だましごと」と。

1. 迷い： 「誤った考え、あざむき、虚偽」ですが、もっと簡単に言えばこれは「エラー」です。パウロたちは神の福音を正確に語りました。こういうことを敢えて言ったのは、このようなことをしていた人たちが現実にいたからです。しかも、パウロたちはこのような動機をもって働きをしていると、訴える人たちもいたのです。ですから、パウロは自分たちの働きの動機が決して不純ではないことを伝えるのです。ですから、パウロはこの「迷い」ということばを使って、「私たちは神のメッセージを正確に伝えている」と言います。IIコリント2：17に「私たちは、多くの人のように、神のことばに混ぜ物をして売するようなことはせず、真心から、また神によって、神の御前でキリストにあって語るのです。」とある通りです。悲しいことに、このようなことが為され続けていたのです。神のことばに混ぜ物をするのです。この「混ぜ物」ということばは、小売商人が不正をすることからこのことばが使われるのです。なぜなら、イザヤ1：22に「おまえの銀は、かなかすになった。おまえの良い酒も、水で割ってある。」とあるように、少しでも利益を得るために良い酒でも水を混ぜたのです。

だから、この偽りの教師たちは神のことばをその通り語らずに、そこにいろいろなものを混ぜたのです。そういうことがあってはならないと、パウロは「私たちは神のことばをその通りに正確に語った」と言います。今も、このことが必要です。いろいろな媒体を通してこのようなことがこの国でも起きていることに皆さんも気付かれるでしょう。神のことばをその通り語るということは、残念ながら、教会ではポピュラーではありません。クリスチャンの間でもそうです。彼らが求めているのは「聞いていて楽しい話」です。

2. 不純な心 : そこでパウロが二つ目に「不純な心」を挙げています。これは「性的、また道徳的な汚れ」を意味することばです。パウロが言いたいことは、自分は不純な動機で福音を伝えたのではない。確かに、不純な動機で語る人たちがいたのです。彼らがメッセージを語るのは、そのことによって人々の信頼を得て何とかして自分のその不純な願望を満たすことを願ったのです。また、そのように実際に歩んでいる人たち、もちろん、これは性的道徳的汚れだけでなく、成功への願望、野心、自尊心、貪欲、自分の評判を何とか高めようとするなど、これらのことすべてが含まれます。

教会を大きくする！なぜ、そのことを願うのでしょうか？そのことを目的にするとはどういうことですか？自分たちの功績を自慢するためです。「見てください！私たちの教会を…」と。神の関心は建物ではない。態度でもない。神の関心は私たちひとり一人の主に対する信仰です。ある牧師は自分たちが数を多くして大きな教会を築くことによって、「自分は成功した！」と自分の名を売ることが目的かもしれません。そういう人たちがいたのです。だから、パウロは言うのです。「私たちはその人たちと同じではない。不純な心で福音宣教をしているのではない」と。

3. だましごと : このことばは「えさで捕まえる、狡猾、策略」を意味し、「わな、えさ」という意味があることばです。それによって獲物を獲得するのです。釣りをするとき釣り針にえさを付けます。魚を釣るためです。わなを仕掛ける、獲物を得るためです。ですから、あらゆる種類の企み、策略、はかりごと、そういうものを指すことばです。私たちはこのように聞いても非現実的に思うかもしれませんが、でも、皆さん、たとえば、キリスト教という名でいろいろな奇蹟を行うことによって—実際には奇蹟ではないのですが—一人々の注目を得て多くの会衆を獲得して、それを通して自分たちの私腹を肥やしているという、そのような働きが全世界的に行われています。今、このときも…。教会が金儲けの道具になっているのです。

先日のカンファレンスで私が初めて聞いたことばがあります。それは「新使徒教会」です。2004年にフラー神学校の教会成長の教授であったピーター・ワグナーが宣言するのです。「新使徒教会」が今まさに始まったと。使徒の時代にはいろいろな奇蹟が行われました。今も同じだ、そういう時代が始まったのだと。しかも、使徒になるために学校を築いてそこを卒業することによって使徒になると。納める金額も決まっています。いくら払ったら使徒になれるのかと。年間330ドルで、インターナショナルの使徒になれる、カップルなら650ドルと割引があります。信じがたことですが、このようなことが今起こっていて、こういう働きが福音派を惑わしているのです。

彼らがやっていることはみことばから分離しています。彼らは「彼らの聖書」をもっています。それを訳した人は、原語から訳したのではなく、神が語っておられると信じることを記したのです。大変危険です。「こんなことを神が私に語られた」とそれを記して、それが彼らの聖書なのです。彼らの特徴は「神が私に語られました。神が私に話されました。昨晚夢を見て…」と、神のことばでは不十分だ、だから、それ以上の何か経験が要するのです。今、皆さんお聞きになって非常に奇異に思われるでしょう。そのようなことは周りに起こっていないからです。でも、私たちの国でもこの教会が二つ存在しています。これらのことを信じこれらのことを教える人たちはです。そして、この人たちは大変な巨額の富を得ています。奇蹟を行うことによって多くの人たちを引き付けるからです。彼らがお金を払うことによって何かが為されるのか？何も為されません。このような偽りの教師たちの私腹だけが肥やされていくのです。まさに、「だましごと」です。だまして、弱い人たちを捕らえるような…。パウロは「私たちにはそのようなことは全くない」と言います。彼らがすることは、罪に捕らわれた人を解放することです。このような人たちが存在し、この人たちはこのような動機で働きをしていたゆえに、パウロたちは「私たちは違う！」とそのことを言うのです。

福音を正確に伝えることはもちろん、正しい動機で伝えることが大切だということ。皆さん、私たちが福音を語る時に、しっかりと神のメッセージを語ることです。たとえ、人々がどのように思っても、私たちはそのメッセージを語り続けること、同時に、私たちの心をしっかりと吟味すること、自分の動機をしっかりと探りながら福音宣教に励むことです。

C. 福音宣教の目的 4節

4節でパウロは「福音宣教の目的」について教えています。「私たちは神に認められて福音をゆだねられた者ですから、それにふさわしく、人を喜ばせようとしてではなく、私たちの心をお調べになる神を喜ばせようとして語るのです。」

1. 神からの使命 = 自分に課せられた任務

「神からの使命」を自分はいただいていると言います。神が自分に課せられた任務とは何か？

1) 神に認められて : 「神に認められて」ということばがあります。これは「テストをして価値があると認める」ということです。テストをした後「良し」と認めるということ。神がテストをしてパウロのことを「価値がある」と判断されたということです。完了形を使っているということは、過去において認められたそのことが今も継続しているということです。だから、パウロは福音を伝えるという務めを神からいただいた、その時にパウロが分かっていたことは、神は私をテストして、その上で私にこの務めをくださったということです。その意識をもっていました。だから、

2) ゆだねられた : 「福音をゆだねられた者」だと言っています。神からこの福音のメッセージを委託されているのです。ですから、パウロはこの福音宣教という特権を、神はテストした上で私に委託してくださったと言うのです。そのようにパウロは思っていたから、この務めを真剣に果たそうとしたのです。私たちも覚えなければいけません。こんな私たちに神は福音のメッセージを託してくださったということです。私たちもその託された務めの重大さ、重さをしっかり覚えることです。パウロはそのことをしっかり覚えながら福音宣教に励んだのです。

2. 神への使命 = 神に対する自分の任務

今度は「神に対する自分の任務、働き」もしっかり覚えていました。

1) 使命でないこと : それは「人を喜ばせよう」とすることです。パウロは福音宣教において人を喜ばせようなどと思っていません。それが彼の動機でも目的でもなかった。もし、私たちが人を喜ばせようと思ったなら、人々が聞かなければならないメッセージを語るのではなく、聞きたいメッセージを語るのです。パウロがこのように言う通りです。Ⅱテモテ4 : 3-4「:3 というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、」、なぜですか？神の正しい教えは私たちを教え私たちを成長させるものです。でも、その教えに耳を貸そうとしないのです。却って、「自分につごうの良いことを言うてもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、:4 真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。」、神の教えに従うよりも自分の考えや自分の思いに従って生きようとするからです。自分の思い通りに生きようとする人の障害は「神の真理、神のみことば」です。

なぜなら、神のみことばは私たちにどうするべきか、どのように歩いていくのかを教えてください。しかし、自分のやりたいことをしたい人にはそれは「いやなこと」です。見ることも拒みます。それを見ることによって自分のしたいことができなくなるからです。だから、神のことばに耳を傾けないで、自分の聞きたいことを語ってくれる人のことばに耳を傾けるのです。私たち人間の弱さはそこにあります。自分のしたいことに反対する人のところには行かないのです。賛成してくれる人と時間を取りたい。ですから、Aさんのところに行って「ダメよ」と言われたらBさんのところに行き、「ダメよ」と言われたらCさんのところに行き、「ダメよ」と言われたらDさんのところに行き…、そして、最後に、Zさんに「いいよ」と言われたなら「みんなそう言ってくれました」と言いたいのです。そこには何の祝福もありません。

ですから、私たちに与えられた神からの務めとは、神が「語れ」ということを語ることです。ある信仰者が、その方は浜寺の礼拝でメッセージを聞かれてかなりになります。「もし、浜寺のメッセージを私の教会で語ったなら、教会員の半分はいなくなります。」と言われました。みな、自分の聞きたいことを語ってくれる人を求めるのです。神がこう言われているということは聞きたくない、自分のやりたいことが出来なくなってしまうからと。パウロは「人を喜ばせようとして福音を伝えたのではない」と言いました。人から憎まれるかもしれない、嫌われるかもしれない、確かに、その恐れはありますね。福音を語ったらみな居なくなってしまうのではないかと。でも、彼らが地獄に行った後皆さんを恨むより、その前に大切なメッセージを伝えた方がいいと思いませんか？「なぜ、語ってくれなかったのか！」と彼らがあなたを恨む前に、どんなに憎まれても私たちは語らなければならないメッセージを語るのです。パウロは人を喜ばせるために福音を語ったではありません。

2) 使命であること : 今度は「使命であること」を言います。「私たちの心をお調べになる神を喜ばせようとして語るのです。」、罪があつては神に喜ばれることはありません。みことばを見ましょう。ローマ書8 : 8「肉にある者は神を喜ばせることができません。」、箴言11 : 20「心の曲がった者は【主】に忌みきらわれる。しかしまっすぐに道を歩む者は主に喜ばれる」、同じく箴言が続きます。12 : 22「偽りのくちびるは【主】に忌みきらわれる。真実を行う者は主に喜ばれる。」、15 : 8「悪者のいけにえは

【主】に忌みきらわれる。正しい者の祈りは主に喜ばれる。」、21:3「正義と公義を行うことは、いけにえにまさって【主】に喜ばれる。」、

パウロの願いは人ではなく、何とか神を喜ばせることでした。Ⅱコリント5:9に「そういうわけで、肉体の中にあろうと、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。」とある通りです。また、コロサイ1:10「また、主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように。」、ここに「あらゆる点で主に喜ばれ、」とあります。この「喜ばれる」ということばは「神に受け入れられる、神を満足させる」という意味です。ですからパウロは、私たちが考えること、行うこと、口にすること、そのすべてが神を満足させるようにと願ったのです。ですから、神を満足させるものかどうかを常に問い掛けながら選択をしたのです。

ピリピ1:20「それは、私がどういふばあいにも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにしても、死ぬにしても、私の身によって、キリストのすばらしさが現わされることを求める私の切なる願いと望みにかなっているのです。」と、キリストのすばらしさが現わされることを彼は求めていたのです。キリストの偉大さを誉め称えること、敬意を払うことです。今、この箇所を新改訳聖書の第2版を読みましたが、第3版は少し訳が変わっています。「それは私の切なる祈りと願いにかなっています。すなわち、どんな場合にも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにも死ぬにも私の身によって、キリストがあがめられることです。」となっています。つまり、パウロが望んだこと、この二つの訳から分かることは、自分の為すことすべてを通してキリストのすばらしさが人々の前に明らかにされ、それを見ている人たちがその神を崇めることです。

パウロはそのように願いそのように生きたのです。パウロの覚悟のことばを見てください。ピリピ1:23「私は、その二つのもの間に板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています。」、使徒21:13「するとパウロは、「あなたがたは、泣いたり、私の心をくじいたりして、いったい何をしているのですか。私は、主イエスの御名のためなら、エルサレムで縛られることばかりでなく、死ぬことさえも覚悟しています」と答えた。」

*これがパウロの人生そのものでした : 「神に喜ばれることかどうか」、「神の栄光を現すことかどうか」、これがパウロの選択の基準だったのです。ということは、私たちもそのように歩むことができるということです。そのためには、私たちの言動、私たちのすべてが主に喜ばれるかどうか？そのことをしっかり考えて選択をしなければなりません。

実は、そのことをパウロは教えます。もう一度、今日のテキスト、Ⅰテサロニケ2:4「私たちは神に認められて福音をゆだねられた者ですから、…」、そのことをちゃんと意識しています。重大な責任が主から与えられていると言います。「それにふさわしく、人を喜ばせようとしてではなく、私たちの心をお調べになる神を喜ばせようとして語るのです。」、

*問題は「心」

「心をお調べになる」とは「試す、吟味する、検討する」ということです。4節の初めの「認められて」と同じことばが使われています。神が自分をテストしてそれで価値ある者と認めてくださった、それが「認められて」の意味でした。そして、4節の終わりに「心をお調べになる」と同じことばです。でも、時制が違うのです。「認められて」は完了形です。神はそのようなことをすでに為されその結果が伴っているのです。「心をお調べになる」は現在形です。神が継続して今も変わらず私たちの心をお調べになっているということです。私たちの心を試しておられるのです。ですから、神は私たちの心を常にご覧になっているのです。どんな心で、どんな思いをもってその働きをしているのか？と。パウロたちはいつも自分たちの心を吟味しながら宣教していました。本当に私は神に喜んでいただきたいと、その思いが動機となって働きをしているのかどうか、そのことをパウロはいつも自分自身に問い掛けながら働きをしていました。

私たちが福音宣教をするときに覚えるべきことは、やっていることが神に喜んでいただいているかどうか、神を満足させているかどうかです。パウロはこのように言っています。エペソ5:10「そのためには、主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。」、この「見分ける」とは「検査や試験をした後で認める」ということです。ですから、私たちのすること一つひとつをじっくり調べた上でやっていきなさいと言っているのです。私たちの言動を何によって調べるのか？聖書、神のことばです。私たちはみことばを見て、そのみことばに照らし合わせて、私の心は正しいのかどうか？私の考えていることは正しいのかどうか？私の歩みは正しいのかどうか？神が言われていることを基準に私たちは歩むのです。それ以外に神を喜ばせる道はありません。神を喜ばせようとするなら神のみことばに従って行くのです。私たちがやりたいことではなく神が言われることを行うのです。それを通して神は喜ばれ満足されます。

みことばをもって判断することがいかに大切か、この当時、中東において壺が売られているところでは、その壺が壊れていないかどうかを判断する方法が必要でした。もしかすると、欠けた所を糊でくっつけたかもしれない、店の主人に聞いても正直なことは言いません。方法があったのです。壺を上げてにかざすのです。壊れているものはヒビがいます。そうして彼らは試したのです。

私たちは自分たちがしていることを聖書に照らしてみことばに沿っているのかどうか？これが私たちの基準です。私たちはみことばに従って行くのです。

結論 : パウロが最後に教えてくれたことは、神を喜ばせることが私たちのすべての目的だということです。そのためには私たちは自分の心を吟味し続けることが不可欠だと見て来ました。私たちが福音を伝えるときに、また、主に仕える者としてみことばを教えたり、そのみことばに従って行くときに、私たちの関心は自分の心でなければなりません。パウロはテモテに宛てた手紙の中で、よく彼の遺言などと言われますが、こんなことをテモテに告げます。Ⅱテモテ3：10-11「:10 しかし、あなたは、私の教え、行動、計画、信仰、寛容、愛、忍耐に、:11 またアンテオケ、イコニオム、ルステラで私にふりかかった迫害や苦難にも、よくついて来てくれました。…」、大変な迫害を通して来た、テモテよ、あなたはそのことを知っているでしょう？と、パウロは敢えてこのことを言ったのです。なぜか？テモテから人間的な慰めをもらうためではなかった。「あなたは偉大です。こんなことにも耐えて来た、すばらしい！！」という彼からの称賛を求めて言ったのではありません。理由があります。こう続きます。「何というひどい迫害に私は耐えて来たことでしょう。…」、この後「しかし、主はいっさいのことから私を救い出してくださいました。」、パウロは日々の生活にある様々な迫害から、目を主に向けさせるのです。迫害の中でも神はちゃんと私を助けてくれたでしょう…と。あなたにも同じことが起こります。福音宣教をするときにいろいろな困難、迫害があるでしょう、でも、神を見るのですと。まさに、パウロの愛するテモテに対するすばらしい遺言です。そのように生きた人物から、そのように生きようとしている人物へのメッセージです。

今日、私たちが見て来たのは、福音宣教という神がくださったすばらしい働きをするに当たって、私たちは自分自身を吟味しなければならない。やっているからいいのではなく、神が喜んでくださっているかどうかです。そのことを私たちは考えなければなりません。そのために私たちは神の力に頼らなければならない。動機をしっかりと探らなければならない。そして、何のためにやっているのかと、しっかり目的を覚えることです。主が喜んでくださるなら正しいことです。あなたにはすばらしい報いがあります。でも、働きをしてもその動機が違っていたら、働きをしても神がお喜びになっていなければ、虚しいことです。

今週、私たちはすばらしい伝道の機会を与えられました（JOY JOY 5 DAYS）。しかし、このときだけ伝道するのではなく、毎日の生活の中で伝道するのです。伝道するに当たって、私たちはもう一度自分の働きを吟味することが必要です。どうぞ、今日学んだことを心に蓄えて、神が喜ばれる心をもって福音宣教に励んでいきましょう。主が喜んでくださる、それが私たちの喜びでもあるからです。